日本ハーディ協会ニュース

NEWS from THE THOMAS HARDY SOCIETY OF JAPAN

第85号（2019年４月１日号）

発行者 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院人文学研究科内
日本ハーディ協会　jimu.thsjapan@gmail.com
編集者 宮崎隆義　miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

（今村紅子氏撮影：ドーチェスター近郊の Max Gate にて。2011 年初秋。）

ハーディ作品初出雑誌

清　宮　倫　子

定年退職してから、そろそろ2年になる。退職したてのころは、まだ仕事を続けられそうな気がしたが、やはり、70歳が限界だと思い知った。固有名詞がすらすらと出てこない。読解力はさほど落ちてはいないと思うが、表現力は落ちている。体の中から老化しているのだから、当然、脳も老化しているのである。その先にあるものは見えている。

命とは時間なのだと思う。時間を大切にしようと決心する。どう使ったらいいのだろうか？という問題は、どう使ってしまったかの反省へと導かれる。約半世紀間、小論文を書いてきた。博士論文も書いた。多数の本を読んだ。しかし、読み方に癖がついてしまった。下心を持って読む癖である。著作や論文作成の足しにならない本は始めから読まない。読んでいて、これは使えそうだと思える本は丁寧に読む。功利的読書が身についてしまった。

もう論文は書かない、研究発表もしない、と決めたら楽になった。全く自由に読書する。下心

無く。といっても、馬鹿馬鹿しい本を読むのは時間の無駄だから、読み始めてそう感じたらすぐ止める。魂を揺さぶるような本がないかと探す。

定年退職したとき、研究室から自宅に運び込んだ図書を整理していたら、ハーディ作品初出雑誌が35冊出てきた。Christie'sで落札したものである。昨今はウェブサイトでかなりの文献を閲覧できるようになっているので、大枚をはたいて馬鹿な買い物をしたのかも知れないと思った。30x40x6（cm）5kgの大型本もある。しかし、しみじみ眺めてみると、ウェブサイトでは味わえない面白味があることに気付いた。たとえていえば、博物館でガラスごしに骨董をみるのと、自腹を切って手にいれた骨董を普段使いにする違いである。その作品の環境ばかりでなく、手ざわり、匂いなども楽しみながら読む。勿論、これを資料として論文を書く気はない。したがって、ハーディ協会会員諸氏の研究のお役に立つなら、お貸しすることにしたい。

清宮倫子所蔵　ハーディ作品初出雑誌目録

（------->の左側は雑誌名、右側はそこに掲載されているHardyの作品名）

1. Harper's Monthly Magazine. No.716. 1910----->“The Satin Shoes、A Poem”
2. Harper's New Monthly Magazine. June 1881----->*A Laodicean*
3. Harper's Monthly Magazine. Dec. 1880-May 1881--->*A Laodicean*
4. Harper's New Monthly Magazine. Dec.1894----->*The Simpletons（Jude）*
5. Harper's New Monthly Magazine. Dec.1889--->*The First Countess of Wessex*
6. Harper's New Monthly Magazine. June 1891--->*Wessex Folk*
7. To-Day. No.20、Vol.4 October 1918------->“Jezreel”
8. The English Review. Sept. 1913------->“The Place on the Map”
9. The Chapbook、A miscellany of Poetry. 1920-1922--->“The Church and the Wedding”
10. The London Mercury. Feb.1923--->“On the Portrait of a Woman about to be Hanged”
11. The London Mercury. Jan. 1920----> *A Glimpse from the Train*
12. Life and Letters. Jun.1928----->“The Science of Fiction”
13. The Quarterly Magazine. No.23. April 1879----> *The Distracted Young Preacher*
14. The London Magazine. Jan. 1956 --->“Some Unpublished Poems by Thomas Hardy”by Evelyn Hardy
15. The London Magazine. Nov. 1958--->“Plots for Five Unpublished Short Stories”
16. Longman's Magazine. July 1883----->“The Dorsetshire Labourer”
17. The London Magazine. Sept.1903--->*The Melancholy Hussar*
18. The Cornhill Magazine. April 1900----->*The Souls of the Slain*
19. The Cornhill Magazine. August 1906----->“Memories of Church Restoration”
20. The Cornhill Magazine. July to December 1906--->“Memories of Church Restoration”
21. The Cornhill Magazine. Jan.to June 1876----->*The Hand of Ethelberta*
22. The Cornhill Magazine. July 1875--->*The Hand of Ethelberta*
23. Longman's Magazine. Nov. 1882-April 1883----->*The Three Strangers*
24. The Pall Mall Magazine. April 1894 ----->*An Imaginative Woman*
25. The Century Magazine. July 1893----->“Thomas Hardy”by Harriet Waters Preston
26. Chambers's Journal. March 1865------->“How I built myself a House”
27. The English Illustrated Magazine 1883-1884----->*Interlopers at the Knap*
28. The English Illustrated Magazine 1892-1893--->“Ancient Earthworks at Casterbridge”
29. The Universal Review Sept.-December 1888----->*A tragedy of two Ambitions*

30. The Fortnightly Review. May 1891------>*The Midnight Baptism*
31. The Pall Mall Magazine. April 1894------>*An Imaginative Woman*
32. The Gentleman's Magazine. July-Dec.1875----->*The Fire at Tranter Swetley's*
33. Illustrated London News. July 1892 ----->*The Well-Beloved*
34. The Graphic. Vol.44. July-Dec. 1891 ------>*Tess of the d'Urbervilles*
35. The Graphic. Jan.-June 1886 ---->*The Mayor of Casterbridge*

このうち、2、4、15、24、29、30、31、32、33、34、35は、中央大学図書館に同一のものが収蔵されている。

Charlotte MewとHardy

並　木　幸　充

Thomas Hardyは詩人Charlotte Mew（1869-1928）を高く評価していた。そのことは、1921年10月29日、Oxford社のVere H. Collinsが来訪し、John Collings Squire編集の*Women Poets: A Book of Women's Verse* をHardy夫妻に渡した際のエピソードからもうかがえる。その詩集を手にしたFlorenceが、Miss Mewの詩が一つも入っていないと口にすると、Hardyは、「何も入っていないって！それでは現役の作家は一人も入っていないのだろう」と答えた。Florenceが重ねて、いいえ、誰それの詩は入っていますよ、と指摘すると、Hardyはさらに、「Miss Mewは断然、現役最高の女性詩人だ。他の詩人が忘れられても彼女は読み継がれていくだろう」とまで発言したという。アンソロジーの編者Squireに対しても、1922年1月27日付けの手紙で、Charlotte Mewが入ってないことに失望したとし、「私の判断では、寡作ではあるが、最近出会った最も偉大な女性詩人です」と述べている。これは明らかにリップサービスどころではなく、相当本気で発言したものと思われる。

こうしたHardyの評価は、Charlotteが生前に出版した唯一の詩集、*The Farmer's Bride*（1916年出版、1921年増補版）の30編に満たない詩などを読んでなされたと考えられる。Hardyが初めてCharlotteの詩集を手に入れたのは、1918年6月のことで、Sydney Cockerellから送ってもらったことが、同年6月22日付け同氏あてのFlorenceの手紙からわかる。最初にCharlotteの詩に熱中したのはFlorenceの方で、巻頭の“The Farmer's Bride”が特に気に入ったらしい。Hardyは彼女からいくつもの詩を読み聞かせてもらううちに、次第に夢中になっていったようで、7月27日の時点では、「注意深く研究している」までになったという。そして、ついには自分の方からCharlotteをMax Gateに招待し、1918年12月に彼女の訪問は実現している。ここで興味をそそられるのは、Hardyがこの詩人のどういうところを評価したのかという点である。

技法面から見ると、すでに W. S. Bluntなどから批判があったように、Charlotteの詩の特徴の一つは、状況を説明せずにいきなり詩の世界へ読者を放り込む傾向が強く見られる点である。しかし、Hardy自身も、最初のうち彼女の詩は少しあいまいだと思っていたようなので、ある意味でこうしたモダンな手法がすぐに彼の心をとらえたとは即断できない。むしろパーソナルな共感の方が大きかったように思われる。残念ながら、Hardyが自分の評価理由について直接言及した記録は残されていないようなので、非学問的でいささか気が引けるが、推測の域を出ない思い付きを若干述べさせていただこう。

そこで、作品そのものを少し取り上げてみたい。Florenceによると、詩集を読み始めた1918年7月当初、Hardyは、“In Nunhead Cemetery”という詩が特に気に入っていたという。主要人物は、墓堀り（he）、墓地を訪れた語り手の男性（I）、そして埋葬された女性（you）の三人で、目の前の墓地の情景と、回想された過去の情景が混交していくつくりになっている。語り手が、手向けられた花や子供の一人が墓を指さし笑う何気ない行為にぞっとしたり、今はもう亡くなった女性に向かって、“Now I will burn you back, I will burn you through, / Though I am damned for it we two will lie / And burn, …”（10）と呼びかける様子に、どこか狂気にかられるような面が示される（“Ken”や“On the Asylum Road”にも同種の調子が見られる）。そして最後は次のように結ばれる。

I shall stay here: here you can see the sky;
The houses in the streets are much too high;
　　There is no one left to speak to there;
　　Here they are everywhere,
And just above them fields and fields of roses lie –
If he would dig it all up again they would not die.　（10）

realとunrealなものが共存し、現在の情景と過去の情景が重なってくる構成などは、なるほどHardyが好みそうな気がする。

1918年12月、Florenceはわざと作者名を伏せてある詩を読み聞かせたところ、Hardyは背もたれから身を起こし、「それはすばらしい。誰が書いたのだ」と強い関心を示した。それは、1913年11月、*The Englishwoman*誌に掲載された“Péri en mer”という Charlotteの詩であった。

One day the friends who stand about my bed
　Will slowly turn from it to speak of me
Indulgently, as of the newly dead,
　Not knowing how I perished by the sea,
That night in summer when the gulls topped white
　The crowded masts cut black against a sky
Of fading rose – where suddenly the light
　Of Youth went out, and I, no longer I,
Climbed home, the homeless ghost I was to be.
　Yet as I passed, they sped me up the heights –
Old seamen round the door of the Abri
　De la Tempête. Even on quiet nights
　So may some ship go down with all her lights
Beyond the sight of watchers on the quay!　（61）

遭難して瀕死になった語り手が、その折に目にした、白と黒の色彩からなるたそがれ時の船の情景を回想し、更に自らの死の影を暗示していくのが表面上の流れだが、“light of Youth”の部分で、意識の喪失と闇の訪れに、失われた青春というイメージを重ね合わせてくる。Hardyが思わず引き寄せられたのも、巧みに織り交ぜられたイメージの底流にある、避けられない死の意識に、何かしらの共感を感じたからなのだろうか。

Charlotte Mew の代表作は、“The Farmer's Bride”であることは、彼女の詩の出版元のAlida Monro が*The Nation*に載ったその詩（掲載は1912年2月3日）を読んで強く心を揺り動かされ、手紙を送って、詩集を出版する意志を作者に問い合わせた事実からも知られる。その詩は6連からなり、女性というより、幼い妖精のような娘が、農場主と結婚した途端、そのあとの営みや生活をすべて怖がって逃げ出してしまうエピソードを扱う。農場総出で彼女を探し出し、家に連れ戻したあとに、以下の連が続く。

She does the work about the house
As well as most, but like a mouse:
    Happy enough to chat and play
    With birds and rabbits and such as they,
    So long as men-folk keep away.
“Not near, not near!” her eyes beseech
When one of us comes within reach.
    The women say that beasts in stall
    Look round like children at her call.
    I've hardly heard her speak at all.　(1)

そして、最終連で農場主の視点で、次のように結ばれる。

    She sleeps up in the attic there
    Alone, poor maid. 'Tis but a stair
Betwixt us. Oh! my God! the down,
The soft young down of her, the brown,
The brown of her – her eyes, her hair, her hair!　(2)

非常に繊細な感受性と官能性などは、どこかSue Brideheadを思い起こさせられる。AlidaやFlorenceばかりでなく、Hardyもこの作品に興味をひかれた可能性は十分に考えられる。

もう一つ、Charlotteの詩は、そのリズムが極めて独特であることも特徴的である。押韻はきちんと踏んでいるが、各連のシラブルは比較的自由であり、形式よりも自分のイメージを重視している感がある。例えば、“Madeleine in Church”では、各行が異常に異なり、わずか3語の行もあれば、20語に及ぶ行もある。当然印刷の際に一行で収まらないところも出てくる。強弱のストレスも、弱強調が基本にあるようだが、突如強弱弱強あるいは弱弱強のようなパターンが入ってくる。詩を常に音読していたHardyにとって、Charlotte Mewの詩のリズムには、簡単には聞き過ごせないものを感じたかもしれない。

Charlotte Mewは、1927年6月18日、最愛の妹Anneを病気で失ったあと神経症に陥り、妹のあとを追うように、翌年3月24日に服毒自殺した。その前日に、訪ねてきたAlidaに一番貴重なものとして、Hardyが書き写していた彼女の詩“Fin de Féte”を手渡した。Hardy自筆のその写しは、同年1月11日にHardyが亡くなったあと机の引き出しから発見され、彼の遺言執行人の一人、Sydney CockerellによりCharlotteに届けられていたという。

その詩は、恋人に呼びかける形で始まり、森の中に一晩二人の子供を眠らせると、鳥が舞い降りてきて彼らを葉で覆うイメージが提示される。そして、それと対比して、語り手は、“With just the shadow of a waving bough / In the moonlight over your bed”（40）しかない自分たち

の“lonely head”に言及する形で詩を結んでいる。
それにしてもHardyは、どういう心境でこの詩を書き写したのだろうか。

詩の引用はすべて、Val Warner編、*Charlotte Mew: Collected Poems & Prose*（Carcanet Press, 1981）による。

昨年夏に5年ぶりにイギリスを訪れた話

西　村　美　保

かつてはあんなに気軽に、そして楽しみにしながら海外へ行ったのに、最近は腰が重くなった。イギリスという国との蜜月が終わり、行ってから感じる不自由さが容易に想像できるからだろう。特に体調が万全でないのに一人旅をするとなると、無事に帰って来れるのだろうかと思い、不安が先に立つ。それでも昨年5年ぶりにイギリスを訪れたので、旅の一部を披露することにする。

これまでドーセットまで足を延ばす機会がなかったので、今回は旅程に組み入れ、ハーディの二つの家をタクシーで回った。生家のコテージに行く際、チケットセンターから森のようなところを歩いて抜ける道を選んだのだが、それはちょっとした冒険だった。誰にも会わず不安になる中歩き続け、突如あの可愛らしいかやぶき屋根のコテージが見えて来たときは安堵した。そこだけ光が差しているように思われた。バングラデシュ出身のタクシー運転手が何度も入館チケットを買うのかと聞いてくるのが不思議だったが、マックス・ゲイトに着いた際は「外から見たっていいのでは」とあまりに率直なコメントをしたので合点がいき、同時に可笑しくなった。確かに興味のない人にとってはそんなものかもしれない。彼を待たせてマックス・ゲイトに入ると、中を案内するスタッフにここは家そのものよりも来客が特徴的なのだと説明された。それでも、玄関を入ってすぐに見える階段やリビングなどは堂々としていて、重厚感と心地よさを感じさせる造りである。家のサイズが適度で、どの部屋も確かに使われていた気配があり、安心感があった。その晩テイクアウトのカレー店に入って、注文したものを待つ間、陽気な店主と話をしたら、彼もバングラデシュ出身で、小さなコミュニティなのか運転手のことを知っていた。

翌日は改装の際、ハーディが設計に携わったという教会やドーセット・カウンティ・ミュージアムを尋ねた。教会も素敵だが、ミュージアムが特に印象に残った。ハーディ関係の展示品が多いためでもあるが、建物内部がヴィクトリア朝風のアイアン・ワークを有していたり、美しいモザイクが床に敷かれていたりと強烈な印象を与えるからだ。そのモザイクがローマの遺跡から発掘して移したものだと聞いて驚いた。ドーチェスターの北東7マイルほど行ったところDewlishの“Roman villa”から1975年に発掘されたらしい。よく時間をかけて復元作業をしたものである。古いものを大切にする精神は本当に素晴らしい。ドーチェスターは予想以上ににぎわっていた。街並みが美しいので、ただ散歩するだけでもリラックスできるし、お茶をしたり買い物をする楽しみも味わえる。来るのに少々不便だが、またいつかふらりと訪れてみたいと思わせる町だった。

その翌日電車でロンドン経由でレスターへ向かい、そこで何日か滞在した。レスター大学は2013年に在外研修で半年間お世話になった場所で、今回も図書館を利用させてもらい、当時指

導してくださった教授に再会することもできて有意義な時間を過ごせた。滞在中のある日、電車でNewark Castleまで行き、そこから7マイルのところにある、その名も“The Workhouse, Southwell”という救貧院（1824年に設立）のミュージアムを訪れた。救貧院には陰鬱なイメージがあるが、天気が良かったこともあり、またナショナル・トラストがきちんと運営して修繕も行き届いているので、今では明るい雰囲気である。それでも、スタッフからの説明や掲示物に書かれた情報から、そこでの生活がいかに管理され不自由なものだったかが分かる。Newark Castleの駅から“The Workhouse, Southwell”まではバスを利用したが、帰りがどのバス停で待っていたら正解なのか、分からずかなり苦労した。待っていても来ないので、住民に尋ねて別のバス停に移動したが、それでも来る気配がなくて困っていると、一台のバスが来た。明らかに行き先の違うバスだ。バス会社も違う。しかし手を挙げると、停まって女性の車掌が顔を出した。結局「乗りなさい」と言われて、駅へ行くバスに乗るには便利なシティ・センターまで無料で乗せていってくれた。途中常連らしい年配の男性が降りる時に親しげに彼女と会話をして、同じ筒状の飴を何本も彼女の前に置いて去って行った。そして驚いている私に彼女はそのうちの1本をくれたのだった。彼女のおかげで、無事シティ・センターから駅へ向かうバスに乗れたのだが、降りるタイミングを逃してしまい、少し先で降りた。すると、古い城跡のダイナミックで素晴らしい景観が真向かいにあった。それこそが“Newark Castle”であり、人を癒すような美しい風景を偶然楽しめて幸運だった。

今回こういう機会を与えられて旅の一部を振り返りまとめることができて良かった。ハーディ関連施設や救貧院を訪れた話を今後の授業に役立てることができたらと思う。

ハーディと私　その後

山　内　政　樹

定かではないが、学生の頃、確かRobert Scholesが*Protocols of Reading*で「読むという行為とは、自分自身を読む行為である」と書いている一文を読んだ記憶がある。映画を見てその主人公に共感、あるいはその行動に一喜一憂することができる人、音楽を聴いて涙を流すことができる人、小説を読んで感動することができる人をうらやましく思ったことがある。同じ媒体を通しても、その捉え方は十人十色である。このようなことができる人は、映画や小説の主人公や歌詞のフレーズに自分自身のこれまでの経験や感情を投影し、その媒体を通して、以前の記憶がよみがえってくるのであろう。だから同じ映画を見ても感動し、涙を流す人とそうでない人もいる。また、同じ小説を読んでも、現在と十年後の自分では、全く違う印象を受けるかもしれない。その十年の間に、多くの経験や知識を積み重ね、理解できなかったことがわかるようになったり、見えていなかったものが鮮明に見えるようになったり、読み流していた部分に引っかかったり、あるいは以前、全く感動しなかったシーンに強く感動を覚えるかもしれない。文化や文学を楽しむということは、これまでの人生をいかに楽しんで来たかを問われているようで、あらためて考えると、読むという行為は恐ろしい。

私が「ハーディと私」を執筆させていただいたのは2012年4月1日、第71号の日本ハーディ協会ニュースにおいてである。その当時の私と今現在の私は、どれだけ違う人間になれたのだろうか、ハーディを読んで純粋に楽しむことができるようになったのか、甚だ疑問である。今、

「ハーディと私　その後」を執筆させていただく機会を得て、あらためて自分自身の活動を振り返ってみた。ハーディの研究を本格的に始めたのが、大学院後期課程に入ってからで、もう（まだ）十五年近くになる。これまで「一年に一本、論文を書きなさい」という福岡忠雄先生のお言葉を頑なに守り続けてきた。書きたいテーマもないままに何とかひねり出し、ひたすら書き続け、焦りと不安の中、論文を執筆した記憶が今も残っている。八年前に赴任先が見つかり、関東に引っ越してきたが、環境が変わっても、ハーディの読み方はあまり変わっていないように感じる。その間に書いた論文は『ダーバヴィル家のテス』の花、『微温の人』のコミュニケーション・ツール、『日陰者ジュード』の豚、『緑樹の陰で』の雨についてなど、おおよそハーディ小説を楽しんで読んだとは思えないアプローチのような気がする。

2018年は、論文執筆を中断して、ハーディ作品には一切触れず、他の小説家の作品とその評論を読むことに費やした。一度、ハーディから離れることで、客観的・俯瞰的にあらたな気持ちでハーディ作品に触れることができると考えたからである。そのリストは、Charles Dickens、Wilkie Collins、George Eliot、Elizabeth Gaskell、E. M. Foster、D. H. Lawrence、Arthur Conan DoyleやOscar Wildeなどである。論文を書けるほど、それぞれの小説家を読みこんだわけではなく、手許にある作品の原文や訳本を手当たり次第、読み漁った。安直な結果としては、ハーディ作品が私には合っているような気がした。ハーディ作品は、性を挟んだ男性と女性の関係の描写が他の小説家と比べて、そのバランスがいいように感じる。その描写は、出版社、それに付随する当時の道徳的因襲と小説家ハーディとの駆け引きの結果、下品にもなりすぎず、上品にもなりすぎない微妙なラインの上で成り立っていると思う。少し話が逸れるが、私は昨年まで、日本ハーディ協会の事務局補助の仕事をしてきた。毎年、事務・発送作業の後、神楽坂で打ち上げをするのが恒例行事のようになっていた。打ち上げで、文学についての話で大いに盛り上がり、楽しい時間を過ごさせていただいた。その中で最も記憶に残っているのが、ハーディ作品のヒーロー・ヒロインで誰が一番魅力的かという話題である。アイドルの総選挙のように、順位づけこそ行わなかったが、意見が分かれたと記憶している。ハーディ作品にはそれだけ個性豊かで、多種多様な、魅力的なヒーロー・ヒロインがいることに私はあらためて気づかされた。魅力に富んだヒーロー・ヒロインが織りなす男女の関係にこそハーディ作品の面白さがあるのではないかと、今現在は考えている。それが研究に結びつくかは別問題ではあるが。

上述したように、「読むという行為とは、自分自身を読む」ということであれば、私自身が、豊かで、楽しい人生を送ることが何より文学研究にとって有益なのではないだろうかと思う。四十代、五十代、六十代と年を重ねるごとに、新たな知識と経験を基に、新たな気持ちでハーディ作品に取り組み、新たな発見、感動を見つけられるように、これからも研究に邁進していく所存である。

ハーディと私

吉　井　浩司郎

高校2年生の時に河出書房の世界文学全集で『テス』を読んだのが、ハーディと私との初めての出会いでした。高校生が翻訳で読んだだけですから出会いとは言えないかも知れませんが、この時は暗い内容の小説だなという程度の印象しか持たなかったと記憶しています。高校生の頃の

私は、スタンダールの『赤と黒』だとかゾラの『居酒屋』『ナナ』といったフランスの小説の方を面白いと思っていました。

その後数年ハーディとは縁がなくて、大学院時代に演習科目の題材の*The Woodlanders*を読んだのがハーディとの再会でした。ほぼ同じ頃、別の演習で*Far from the Madding Crowd*も読んでいました。これらの作品の中では、田舎の人々の実直な生き方が描かれていて、田舎の兼業農家育ちの私は、そこに何か共感を覚えて興味を持ちました。それで、修士論文の対象に*The Mayor of Casterbridge*を選びました。ハーディ小説の研究書も勉強しながら、博士の後期課程では*Tess of the d'Urbervilles*とか*The Return of the Native*などを読んで論文を書いていたのですが、どこかしっくりとこない感覚をもっていました。今にして思えば、その頃の私は論文を書くためにハーディの小説を読んでいたので、そのためにハーディ小説に面白みを見出すことができなかったのでしょう。

そういった状況が尾を引いて、初めて赴任した大学でもハーディ研究（いやむしろ勉強と言った方が相応しいのですが）に打ち込むことができず、ハーディ小説に対する私の不真面目な態度を見抜いた同僚の先輩教師から、面白くないのだったらハーディ小説を読むのを止めたらどうか、とアドバイスされてしまったのです。このアドバイスが引き金となって、私はハーディ小説をその後丸一年間手に取ることはありませんでした。研究の対象をハーディ以外で探したのですが、結局見つかりませんでした。

その頃、私にアドバイスをくれた先輩教師は一部の学生たちと正岡子規の俳句を読む読書会を週一回の頻度で開催していました。私もこの会に参加を勧誘され、子規の俳句を読むことになりました。各自が面白いと思った俳句について分析した報告を開陳していくという形式の読書会でした。この経験と合わせて、この先輩教師から私は貴重なアドバイスを受けることになります。すなわち、英詩の研究を専攻とするこの先輩教師は、研究対象とする英詩の解釈ができたと思っても、再度別の日に読み直して、その英詩の別の解釈の可能性を追求する、という英詩の読み方に関するアドバイスでした。そしてその作業は「その作品がどうにかひと通りには読めた（言い換えれば、自分のものとなった）という親密の情が湧く」まで繰り返し続ける、というものでした。このアドバイスは詩の読み方に関するものですから、小説の読み方にそっくりそのまま当てはめることはできませんが、この先生のやり方を応用して自分なりのハーディ小説の読み方の工夫につなげることができるのではないか、と私は思いました。そして、ハーディ小説を目の前に置いてしばらく瞑想し、心を落ち着けてから、読んでいき、気になった表現、言い回しに出くわすと、そこで、その表現などと自分とを対座させて思いつくままメモを取る、このやり方でハーディ小説の読解を再開したのです。すると、ハーディその人とは言いませんが、ハーディ小説のいろいろな表現が静かな気持ちで読んでいる私の心に語りかけてくる、そんな感じで読めていったのです。このようにしてハーディの小説を読んでいると段々と面白みを見出すことができるようになったようです。出来の悪い私はこの時ようやくハーディ小説の研究の入り口にたどり着けたように思いました。今でもハーディ小説との対座の仕方は以上述べたようなやり方で変わってはいません。

さて、このエッセイを閉じるに当たり、私が担当する講義「英語圏の文化と社会Ⅰ・Ⅱ」で一年の最後に『ダーバヴィル家のテス』を扱っているのですが、どのように扱っているかを紹介したいと思います。まず、ハーディの簡単な伝記と作品のあらすじを確認した後、「家父長制」「身分制」「農場経営の形態」「sexual double standard」「life-lease」などを講義してから、ロマン・ポランスキー監督・脚本の映画『テス』見ています。秋学期は『テス』の他に『ジェイン・エア』『嵐が丘』『クリスマス・キャロル』の3作品を扱っているのですが、すべての講義が終わると、学生には、これら4作品の中から一つを選んでレポートを書いてもらいます。『テス』でレ

ポートを書く学生の中には、いつか翻訳で読んでみたい、と書いている学生もいて、そのような学生が一人でも多く出てくるような授業にしていきたいと願っています。

ハーディと作家協会（と私）

麻　畠　徳　子

このところ、ハーディという個人作家研究から寄り道をして、1884年創設のイギリス作家協会とその周辺について調べる時間が増えている。そうやってテクストからコンテクストに関心が偏ってきた頃、ふと思いがけないところでハーディに再会し、自分の関心の矛先がぐるりと一周してきたような不思議な感覚に陥る。作家協会について調べ始めたきっかけは、たしか近代的作者が社会的に構築される過程を考察するとか何とか、最早動機がよく分からないところにまで手を広げてしまったが、作家協会について調べていくうちにハーディとの接点に思い至ったことは、寄り道ゆえの収穫かもしれない。

1909年6月、逝去したメレディスの後任として、ハーディは作家協会の会長に就任することを求められる。生来、会長職といった重職を好まないハーディは、一度はその依頼を断るものの、評議会からの再度の要請に折れて受諾する。作家協会の初代会長は桂冠詩人のテニスンであり、その後を継いだのがメレディス、ハーディは三代目の協会会長に就任したということになる。そもそも作家協会の会長職というのは、協会創設時当初、発起人のウォルター・ベザントが様々な意見を持つ著名な作家たちをひとつに束ねるための旗印として、実際の協会運営に携わることなく名目上存在するものとして置いた職であった。ディケンズでさえ失敗した作家業という職業団体の組織化を、その巧みな運営で成功させたベザントの手腕は、テニスンを名目上の会長職に就くよう口説き落としたところに発揮されている。そして、ハーディもまた、歴代の作家協会会長という立場がどういうものであったかを理解した上で、自分が会長になったところで協会に益することはないのではないかと評議会への返事にその逡巡をしたためたのであったが、結局引き受けることになったのである。

会長職を引き受けた当時、ハーディはすでに69歳であり、ロンドンから離れてマックス・ゲイトで生活していた。年齢や住まいの利便性を理由に会長職を固辞しても不思議ではないはずだが、ハーディはそのまま1928年に亡くなるまでずっと会長の座に就き続けた。ハーディ自身は1887年に作家協会に入会し、草創期からその活動を支持してきたが、その当時の会長はテニスンであった。時を経て、協会会員であったハーディが会長に就任したという事実は、1909年時点でハーディを作家協会の会長として認める文壇の総意があったことを物語っている。そして、ハーディがかつてテニスンやメレディスの果たしたような社会的役割を引き受ける覚悟を、ここで見せたということも確かなのである。

思うに、このとき会長職を引き受けたということは、テニスンやメレディスから受けた恩義に報いなければならないと感じる時期に、ハーディ自身が差し掛かってきていたということなのではないだろうか。同時代を代表する詩人としてのテニスンの存在は言うまでもなく、メレディスに関しては文字通りハーディが職業作家として世に出るためには欠かせない存在として、ハーディの作家人生に影響を及ぼしてきた。それは、個人的な影響に留まらず、作家という職業についてのハーディの認識を変化させてきたものであるといえる。つらつらと『トマス・ハーディの生

涯』を読み返してみたら、『キャスタブリッジの町長』発表頃には、ハーディは小説家という職業について「単なるつまらない雇われ仕事」と捉えていたと振り返っており、小説の筆を折ることになった際にも、あくまで小説という文芸の一表現様式を個人的に放棄したにすぎないと説明しているあたり、ある時期までは、作家の職業的使命というよりは個人的な営為として文筆活動を認識して語っているように映る。しかし、同書内に収められた1913年9月15日のメモでは「近年の小説作家の動向に思いを巡らす」と記しており、1920年6月に80歳の誕生日を迎えた際の「手控え」には、昨今の文明の崩壊を憂えて「若い詩人や他の作家がなすべきことは、そうした大難を回避する努力なのだ」と記しているあたり、晩年になるにしたがって、文筆活動についての認識をより社会的なものに変化させていっているように思える。

年をとっても精神年齢は幼いほうだったと述懐するハーディだが、一作家として他の作家たちと連帯し、その労働環境の法的・経済的改善に尽力しなければならないという職業的使命感は、若者のように仕事をあくまで個人的な問題と捉えている限りは芽生えないものだろう。作家協会の会長職を引き受けたという事実は、ハーディの職業的使命感の現れと捉えることができるのではないだろうか。そして、いつまでも院生時代の感覚を引きずりながら教壇に立っていた私も、個人の問題と仕事を捉えている限り改善しない状況に追い込まれてようやく遅めの意識改革が促されている今日この頃、このハーディの変化がよく理解できるような気がするのだ。

亡くなる間際、1928年1月10日にハーディは安静を言い渡されているにもかかわらず、作家協会の年金基金に寄付の小切手を書くといって譲らなかったという。体力も減退している最中、なぜ無理をして寄付を言い張ったのか、その胸中は分からない。ただ、その小切手のサインが「いつもの美しくしっかりとした字体とは違う、弱々しい筆致」であったと記録されているあたり、そのサインがハーディ最後の象徴的な意思表示となったといえるだろう。ハーディの人生を締めくくるときにも、作家協会の存在は彼の意識の中にあった。そう思うと、ハーディと作家協会（と私）の不思議な接点に、ますます感じ入るのである。

第61回大会印象記

長　田　　舞

日本ハーディ協会第61回大会は、2018年10月20日（土）、宮崎隆義氏のお世話により、徳島大学常三島キャンパス教養教育4号館201講義室において開催された。まず、庶務委員長の渡千鶴子氏により開会の辞が述べられ、その後午前の部で3名の研究発表が行われた。

最初に、永松京子氏の司会のもと、原雅樹氏と工藤紅氏の発表が行われた。原氏は「『熱のない人』と賭博熱」と題して、『熱のない人』における偶然の観念には、進化論との関連よりも賭博の隠喩の方が重要であるとの観点からこの小説を考察された。賭博の隠喩は、特にウィリアム・デアを通じて多く見受けられ、プロットもまた賭博にみたてられている。ジョージ・サマセットはポーラ・パワーを追う賭博者に、ポーラもまた金融資本主義社会における賭博者として語られる。他の作品よりも金融に関する語彙がはるかに多く用いられ、登場人物たちは偶然が支配する不安定な金融資本主義社会において生きる、偶然に左右される賭博者として描かれている。その中で、賭博者的責任主体は、デアではなく、ド・スタンシー大尉であり、保険的悲観主義に基づく賭博者的責任主体のあり方は、ハーディのペシミズム思想の核心にあるのではないかと論

じられた。

工藤氏は「『森林地の人々』における女たちの“delusion”」と題して、『森林地の人々』に登場する階級の異なる三人の女性登場人物、グレイス・メルベリ、チャーモンド夫人、マーティ・サウスが抱く“delusion”を考察された。まず、グレイスは、自分は村人との共通点がないと思い込み、エドレッド・フィッツピアズを高く評価し、存在しない離婚に関する法律が存在すると思い込む。これらの“delusion”は、すべて父親によって創られたものであり、これは、グレイスが父親の支配を逃れていないことを示すとした。また、チャーモンド夫人は、フィッツピアズとの過去の恋に対して“delusion”を抱く。一方で、ジャイルズ・ウインターボーンとマーティは“delusion”と無縁であると考えられている。しかし、そのマーティもまた、ジャイルズの死後、ジャイルズの独占を夢見ることで、“delusion”に捕われていることが示され、したがって『森林地の人々』は“delusion”に翻弄される三人の女性が描かれた作品であると論じられた。

続いて、宮崎隆義氏の司会のもと、福原俊平氏の発表が行われた。福原氏は「*Tess of the d'Urbervilles* における共感と身体性」と題して、進化論的改良主義者としてのハーディの側面を*Tess*における共感の在り方と結び付けて論じられた。共感は道徳性の出発点であり、ハーディはテスを共感に満ちた道徳的人物として描こうとしている。作品には自然における共感は肯定的に描かれているが、社会における共感は批判的に描かれている。自然の場合とは異なり、テスは社会において共感をうまく利用することができないため、彼女の自己犠牲的な共感の姿にもかかわらず、テスは社会の犠牲者となってしまう。ハーディは社会における共感の対象こそが改良されるべきだと考えており、読者にもテスへの共感を求めることで、因習的な社会を変えようと野心的な試みをおこなっている。この意味で*Tess*には、ハーディの進化論的改良主義があらわれていると論じられた。

昼食をはさみ、午後の部は事務局長の並木幸充氏の司会により総会がおこなわれ、役員改選、会計報告、編集委員会報告、次期大会についてなどが報告された。

その後、3人の講師による「誌上シンポジウム‘Candour in English Fiction’を考える」と題されたシンポジウムが行われた。最初に司会兼講師の上原早苗氏が、*New Review*の1890年1月号において、Walter Besant、Eliza Lynn Linton、Thomas Hardyによっておこなわれた誌上シンポジウム‘Candour in English Fiction’の時代背景を考察された。ベザント、リントン、ハーディいずれの寄稿文にも表現の自由と公共の福祉に対する各自の考えがみられる。1857年の猥褻文書規制法（Obscene Publications Act）制定以降にイギリス出版界に公共の福祉の概念が浸透する。女性や子供が読者と想定され書籍に描かれた性的な描写が削除されただけでなく、ヴィクトリア朝の家庭でおこなわれていたファミリー・リーディング用に、猥雑な表現が除かれた削除版が出版されるようになった。一方、男性読者が前提とされた古典からは性的な描写が削除されることはなかった。また、ベザントが1879年に設立した、教養ある男性によるラブレークラブでは、小説の「率直さ」が奨励されていたにもかかわらず、読者が女性や子供の場合は異なるとベザントは考えていた。1880年代には、ヴィゼッテリー社がÉmile Zolaの翻訳を廉価で出版すると、風俗を乱した罪で社主のヴィゼッテリーが起訴される。ベザントとリントンが表現の自由と公共の福祉の衝突を示す事件としてこの裁判に触れており、誌上シンポジウムがおこなわれたのは、ヴィゼッテリー裁判の影響のもと、イギリス出版界が委縮していた時期にあたると考えられると指摘された。

次に、麻畠徳子氏が「ウォルター・ベザントのプロフェッショナリズム」と題して、プロフェッショナリズムという視点から見たベザントの‘Candour in English Fiction’に対する考えを論じられた。1890年時点において、イギリス文学界を代表したベザントは‘Candour in English Fiction’をリアリズムよりもプロフェッショナリズムの延長上の問題として捉えており、この

点でハーディやリントンとは異なる。ベザントは作家のプロフェッショナリズムの確立のために、創作活動を社会的生産活動にする必要があると考え、1884年に著作権等を保護する目的で作家協会を設立した。18世紀では、作家の創作活動は神秘化され、作家をthe man of geniusとみなしていたが、そのような作家像からの脱却と19世紀的作家のプロフェッショナリズムの確立への思いがベザントの寄稿文に認められる。そして、そのようなベザントの観点からハーディの思想をとらえなおすと、ハーディの中にある作家業に対するロマンチシズムに新しい見解を加えることができるのではないかと論じられた。

最後に、浮岳靖子氏が「Eliza Lynn Lintonと‘Locked Bookcase’」と題して、リントンの寄稿文をアンチフェミニスト的な視点から論じられた。アンチフェミニストとして知られていたリントンは、1894年に*New Review*における「女性の性教育の是非」では、ハーディやベザントが賛成する一方で、異を唱え、女性の社会進出にも批判的であった。リントンは検閲による表現の制限のために特異な設定に終始して人間生活の現実性を忠実に描くことが欠けているとイギリス小説を批判しているが、読者の棲み分けを明確にすることで偉大な文学作品を守ることができると主張しており、イギリス文学の読者を大人の男女対若い女性という二分法が好ましいと考えていた。リントンのこれらの姿勢は、‘Candour in English Fiction’において、読者層に合わせて本を分類するなら、鍵のかかった本棚に本が入れられていてもいいのではないかという議論と重なる。リントンの主張には、阻止すべきは、女性が女性の領域から逸脱することではなく、女性が男性の領域に入り込もうとすることであるという考えが表れていると論じられた。

シンポジウムの後、新妻昭彦会長の司会のもと、「トマス・ハーディとウォーキング」と題して、中島俊郎氏による特別講演がおこなわれた。中島氏は人間や文学のなかに深くくみいれられている意識的な行為であるウォーキングを、ハーディがどのように文学化し、そして、他の文学者とどのように異なるのか論じられた。初めに、文学におけるウォーキングには五つの形態があることを指摘された。一つ目はThomas CoryateやRobert L. Stevensonなどがおこなった“self-realization: pilgrimage”。二つ目はJohn ThelwellやJohn Walking Stewartがおこなった“self-demonstration”。三つめはJohn Gayに代表される歩くことが同時に文学になっている“walker as flaneur”。四つ目は歩くことを経済活動にする“pedestrianism”。五つ目はイギリス文学における一番の伝統である“self-meditation”でWilliam WordsworthやLeslie Stephenがおこなっていると分析し、ハーディの作品はゲイの作品に非常によく似ていると指摘された。そして、ハーディの作品において歩くことがどのように客体化され、文学作品となっているのか分析し、“The Roman Road”において、ローマ道を介して過去と現在を結んでいるところはハーディの小説と共通すると指摘された。さらに、荒野の中を直線に伸びるローマ道は自然と文明というハーディ作品における重要なテーマを表し、歩くことと道の関連で詩を読んだとき、ハーディの創造力の中にローマ道が組み込まれていると論じられた。そして、ハーディの他の小説、*The Return of the Native*、*Jude the Obscure*、*The Mayor of Casterbridge*、における道の描写とローマ道との類似点を指摘し、自然の背景の中に人物が点描されているのではなく、自然の中に同時並行的に人物が描かれているのがハーディの文学作品であり、ハーディの創造力には絶えずローマ道というものがあると論じられた。

すべてのプログラムが終了し、新妻昭彦会長が閉会の辞を述べられた。その後、徳島大学生協食堂「キララ」2階に会場を移し、懇親会が開かれた。大会の運営にご尽力下さった徳島大学および協会事務局の皆様に心よりお礼を申し上げたい。

表紙の写真によせて
キプリングが訪ねたハーディのMax Gate

今　村　紅　子

ドーチェスターの郊外にハーディが設計した邸宅Max Gateで、ハーディ夫妻の生活がはじまったのは1885年のことだった。中期ヴィクトリア朝風の煉瓦造りの二階建ての邸宅は、ハーディがまぎれもなく中産階級の仲間入りをしたことのあかしでもあった。ハーディはMax Gateを故郷での「隠れ家」あるいは‘writing box’と呼び、執筆活動に専念する。ハーディが植えたブナや柊、楡の木などでうっそうとしたMax Gateには当時文壇を賑わせた多くの文人が足を運んだ。その中の一人にラドヤード・キプリングがいた。1928年、ウェストミンスター寺院でのハーディの葬儀では、ジョージ・バーナード・ショー、J. M. バリ、ジョン・ゴールズワージー、A. E. ハウスマン、エドマンド・ゴスなどが棺を担ぐpallbearerとなったが、その中には62歳のキプリングもいた。ハーディとキプリングはどのような関係を築き上げてきたのだろうか。

ハーディがはじめてキプリングに会ったのは、1890年の夏、キプリング24歳、ハーディが50歳の時である。ハーディにとってこの頃は『ダーバヴィル家のテス』出版に至るまでのグランディズムによる検閲の壁と格闘していた時期にあたっていた。『テス』原稿の出版社からの拒絶、雑誌掲載のための削除や訂正に対するハーディの苛立ちは1890年『ニュー・レヴュー』掲載の「イギリス小説の率直さ」にも明らかである。

1889年、インドからリヴァプール港を経てロンドンに戻ったキプリングにとって、ハーディと出会った1890年は『スコッツ・オブザーヴァー』に『兵舎のバラッド』（1892）所収の詩が最初に掲載された年で、インドを舞台とした短編も好評を博し始めた頃だった。現代英国文壇の英雄としてロンドンの文学界でもてはやされはじめたキプリングは、『宝島』のR. L. スティーヴンソンからもその書簡で「自分以来、最も前途有望な若手」として登場を歓迎された。ちなみにスティーヴンソンは、1885年にハーディのMax Gateを家族で訪れている。その妻ファニーはハーディを「とてもはにかみ屋で、哀愁に満ちた人物」と評している。

キプリングはハーディに「東洋」のことや「好奇心をそそるインドの生活について詳しく話した」。それはハーディが新しい世界を覗く瞬間だっただろう。その後、キプリングは出版社との著作権問題などもあって、ハーディと疎遠となった時期もあった。しかし、キプリングをサヴィル・クラブのメンバーにハーディが推薦したように、二人の仲は復活した。キプリングは*Many Inventions*（1893）所収の短編‘A Conference of the Powers’に、Eustace Cheeverという売れっ子の中年作家を登場させている。この小説家はハーディに似ている点が多く、そのモデルはキプリングが敬愛したハーディであることがそれとなく示されていた。キプリングに待望の息子ジョンが誕生した翌月の1897年9月、ドーセットに家を買おうか思い悩んだキプリングは、ハーディのMax Gate邸を訪問している。二人の作家は数日間、自転車に乗りドーセットの日々を楽しんだ。キプリング一家はデボンの海沿いのトーキーの丘の家で暮らしていたがキプリングはあまりその家のデザインが好きではなく、1902年、サリーの丘陵地に佇む邸宅を購入する。イースト・サセックスのバーウォッシュの黄色味を帯びた砂岩でできたジャコビアン様式の邸宅ベイトマンズ（Bateman's）こそが、キプリングが一目惚れして終の棲家とする理想の家そのものだった。ハーディのMax Gate同様、キプリングにとってのBateman'sは都会の喧騒から作家を守る聖域だったのだろう。

事務局よりのお知らせ

会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年会費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付を頂いています。とくに役員の方は、ご協力いただけると幸いです。なお、顧問の先生方は、一般会費のお支払いは不要です。日本ハーディ協会の振替口座番号は00120-5-95275です。会費は、郵便局からお振込ください。同封の振替用紙をご利用の場合は、手数料をお支払いいただく必要はありません。よろしくお願いいたします。

＊会費を3年間滞納なさいますと、退会扱いになりますのでご注意ください。

次回大会について（研究発表募集）

次回第62回大会は、11月2日（土）、桜美林大学にて開催されます。研究発表にご応募の方は4月30日（火）までに、以下のものを、郵便または電子メールにて協会事務局までお送りください。

① 発表要旨：日本語で発表される場合は600字程度、英語の場合は150語程度
② カバーレター：発表タイトル、氏名、所属大学・機関、身分、連絡先（メールアドレスを含む）を記した用紙
③ 略歴表

発表時間は25分で、ほかに5分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演の講師は、京都大学名誉教授の豊田昌倫先生に御快諾いただきました。演題は、現時点では未定ですが、豊田先生の長年の文体論研究のご成果に触れる機会になるものと楽しみにしております。

シンポジウムは宮崎隆義先生が中心となって、ご準備いただいております。テーマなどの詳細は次号の協会ニュースでお知らせいたします。

≪ハーディに関する大会・講演会≫

2019年1月26日に関西大学において、学習院大学名誉教授の塩谷清人氏による「ハーディ小説の諸相、『テス』を中心にして――同時代小説の中で際立つ斬新さ」と題する講演会が行われました。

≪編集後記≫

前任の石井有希子先生からの引継ぎでニュースの編集を担当することとなりました。普段はボーっと生きている類の人間ですが、今の大学、ボーっとしている暇もなくなってしまいました。研究は、ボーっと天井を眺めたり、空を見上げたりすることが大事なのだと、同僚のある数学の先生に聞いたことがありますが、毎日下ばかり見て書類に追われています。中期目標・中期計画だ、年度計画だ、中間・期末評価だ、やれ認証評価だと、どうしてこうも次から次へといろんな書類書きがくるのだろうかとあきれることもあります。

ハーディの研究ということで皆様とご縁ができている協会だと思いますし、ハーディ以外の他のご研究もされている方々も、遠慮されることなく大会に参加されて、いろんな情報を交換されたら豊かな広がりも深みも出てくることでしょう。

年度末のお忙しい時期、今号に玉稿をお寄せいただきました先生方には心より感謝申し上げます。最後になりましたが、初めて編集を担当するにあたり、サポートしていただきました皆様、中央大学生協印刷部の藤様にはあらためて心より御礼申し上げます。

なお、次号は9月発行予定で、原稿の締め切りは7月10日です。論文、随筆は2,000字程度、短信、個人消息は500字程度です。どうぞ皆様、奮ってご寄稿ください。また、ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。お待ちしております。